歴史的市街地における新旧住民による交流の可能性

—福岡県八女市福島地区を中心事例として—

主査　加藤　浩司*1
委員　三栗野　鈴菜*2，田口　紅音*3，中島　宏典*4，高橋　康太郎*5，

近年，歴史的市街地では，空き家を活用し，移住者を迎え入れ，地域の活性化を図る取り組みが盛んに行われている。こうした取り組みの中で地域へ入る移住者には，それぞれが望む暮らしの実現を図る一方，地元住民と様々な交流を育みながら地域社会を支える担い手となっていくことが期待される。しかし，歴史的市街地で，移住者が地域に根づくことは容易でない。

本研究では，主として，重要伝統的建造物群保存地区を有する福岡県八女市福島地区での事例研究から，移住者と地元住民による交流の可能性について検討する。

キーワード：1）歴史的市街地，2）空き家，3）移住者の受け入れ，4）地縁社会，5）交流，6）近所づきあい，7）実体験，8）八女福島

A STUDY ON MIGRANTS' LOCAL INTERCHANGES IN HISTORICAL TOWNS

- Case Study of Yame-Fukushima-

Ch. Koji Kato

Suzuna Mikurino, Akane Taguchi, Hironori Nakashima, Kotaro Takahashi

There are many historical towns in Japan where the community accepts migrants in vacant houses. The purpose of this paper is to consider how migrants in historical towns become familiar with the local community. The residents in such historical towns are conservative in general, so it is difficult for the migrants to get into the local community. In this case study on Yame-Fukushima, the two methods are available: 1) the migrants' attitude to accept diversity between the local people and themselves, and to get involved with them. 2) the community's attitude to accommodate migrants willingly in the district.

1. はじめに

1.1　研究の背景と目的

近年，歴史的市街地では，空き家を活用し，移住者を迎え入れ，地域の活性化を図る取り組みが盛んに行われている。こうした取り組みの中で地域へ入る移住者には，それぞれが望む暮らしの実現を図る一方，地元住民と様々な交流を育みながら地域社会を支える担い手となっていくことが期待される。しかし，既に住民間で緊密な関係が築かれ，様々な「昔ながら」が残る歴史的市街地，時には，自らの経験や価値観とのギャップも感じる歴史的市街地で，移住者が地域に根づくことは容易でない。

歴史的市街地における空き家活用に関する研究の蓄積は豊富である。中でも，空き家化の実態を明らかにする研究[注1)]や，空き家活用の仕組みを扱う研究[注2)]が多い。しかし，転居後の生活における移住者と地域社会の関係に注目するものは少ない。

歴史的市街地における移住者と地元住民による交流はどうすれば進むのか。両者の交流を阻害する要因は何か。これらを念頭に置きつつ，本研究では，主として，重要伝統的建造物群保存地区（以下，重伝建地区）を有する福岡県八女市福島地区（以下，八女福島地区）での事例研究から，移住者と地元住民による交流の可能性について検討することを目的とする。

八女福島地区は，空き家活用の先進地として知られるところであり，筆者1・4は，実際に支援を受けて移住した立場である。本研究の特色は，移住者としての生活体験をふまえ，特に筆者1については，その具体的な内容も描き出しつつ，前述の研究課題にアプローチする点にある。なお，筆者1・4は，2007年～2008年，他メンバーの協力も得て，同地区における空き家活用の発生と活用の仕組みに関する研究を実施した[注3)]。しかし，移住者と地域社会の関係に踏み込む研究は行っていない。

*1 国立高専機構有明高専人間・福祉工学系・准教授　*2 千葉大学工学部建築学科・学生　*3 フリーランス・一級建築士
*4 八女市地域おこし協力隊　*5 NPO法人八女空き家再生スイッチ・理事長

1.2　研究の方法

本研究は，大きく２つのパートから成る。

一つは，主たる部分となる八女福島地区についての事例研究である。これに関しては，まず前提として，関係団体へのヒアリング調査と資料調査から，2015 年度末現在の空き家活用の取り組みを，実績を含めてまとめる。その上で，移住者と地元住民による交流についての研究を行う。ここでの調査の詳細は，第５章で説明する。

もう一つは，移住者の受け入れを進める他地域の取り組みについての研究である。ここでは，中山間地域の事例であるが，和歌山県海草郡紀美野町による取り組みを中心に述べる。理由は，紀美野町では，「ちょっとしたボタンの掛け違えから，後々，取り返しのつかない問題に発展することもある」という認識から，移住者と地元住民の関係形成という点できめ細やかな活動が行われていることに加え，移住者に理解を促すだけでなく，移住者と地元住民の間で異なる価値観を調整するという立場で，取り組みが進められているからである。

2. 他地域の取組み

2.1　全体を通じて

調査（キーパーソンへのヒアリング調査，実地見学，資料収集等）を実施した地域を**表 2-1** に示す。

地域の特徴は異なるが，移住者と地元住民の関係形成は，どの地域でも重要課題として認識されていた[注4)]。対策のとり方は地域ごとに異なるが，支援する側も地域への配慮を大切にしつつ，移住希望者に対し，地域の文化・慣習への理解や地元住民との関わりを大切にするよう促す，という方針は，全ての地域に共通する。これに関し，後述する紀美野町もそうであるが，今井町では，地域の慣習や独自のルール等を記した「今井町・町家暮らしのすすめ[注5)]」というパンフレットを発行し，移住希望者の地域に対する理解促進をサポートしている。

2.2　紀美野町の取り組み

海草郡紀美野町は，和歌山市から自動車で１時間ほどの距離にある中山間地域に位置し，旧野上町と旧美里町が合併（2006 年）して誕生した人口約 9,500 人の自治体である。移住・定住支援に積極的であり，2006 年から和歌山県が進める「わかやま田舎暮らし支援事業[注6)]」の「移住推進市町村」にも当初から指定されている。

紀美野町の移住・定住支援の取り組みで特徴的なことは，前述の通り，移住者と地元住民の間に様々な違いがあることを受け入れた上で，「NPO 法人きみの定住を支援する会（**表 2-2**[注7)]）」と「ワンストップパーソン」が中心となり，両者をつなぐ対応がきめ細やかになされているところにある[注8)]（**図 2-1，2-2**）。

中でも，ここでは，次の３点に注目する[注9)]。①家でなく，地域を気に入って欲しいという立場で支援活動を行っている。ゆえに，紀美野町への移住意思が固まるまで，空き家等の紹介はなされない。②都市部とは生活習慣・環境等の点で多くの違いがあることを，移住希望者に知ってもらうための活動を行っている。**図 2-1** は，相談対応の際，移住希望者に配布されるパンフレット（A4 二折仕上げ／カラー）の構成である。これには，田舎暮らしを経験したことのない移住希望者が，紀美野町での生活をイメージする上で有用な情報が細かく綴られている。③地域の状況を客観的立場から説明できる大学教員の協力を得て，大字単位で開催する「地域説明会」を，一年に数箇所ずつ行っている。この会合は，地域の問題や移住・定住支援の活動について地元住民からの理解を得るために行われているものであり，その中で，移住者との

表 2-1　他地域調査の概要

訪問先	奈良県	広島県	
	橿原市今井町	府中市上下町	呉市豊町
地域の特徴等	寺内町	宿場町 （小商いメッセ）	港町 （小商いメッセ）
実施年月	2015年9月	2016年3月	
調査協力	○NPO法人今井まちなみ再生ネットワーク	○NPO法人アルバトロス ○広島県・地域力創造課	○(同)よ～そろ ○広島県・地域域力創造課

訪問先	和歌山県	兵庫県
	海草郡紀美野町	たつの市龍野町
地域の特徴等	中山間地域	城下町
実施年月	2016年9月	
調査協力	○町・まちづくり課 ○NPO法人きみの定住を支援する会	○NPO法人龍野町家再生活用プロジェクト ○NPO法人ひとまちあーと ○(株)緑葉社

1．まずは相談

移住を考える際には，まず家族で十分話し合いをすることが大切です。［中略］憧れだけでは難しい面が多々あります。［中略］田舎に住んでどんな暮らしをしたいのか，仕事面や生活面を含めた目的をしっかりイメージしておきましょう。

2．町のことをよく知ろう

［前略］生活に必要な医療，教育，行政施設などの情報を集めたり，何度も訪れて年間を通して気候を体感したりすることが大切です。当会では，希望者の方を対象に地域の案内を行っています。既に定住されている方々を訪ねて体験話を聞いたり，地元の方から地域の現状を教えてもらったりすることができます。また，町内で行われる様々なイベントにも積極的に参加してみましょう。

3．仮の仮り暮らし

町のことや田舎暮らしのことをもっとよく知るために，生活体験施設を用意しています。生活の便や近所づきあいなど，田舎の日々の暮らしを体験して移住後のイメージを膨らませましょう。［中略］最長１年間住むことができる短期滞在施設を用意しています。またこの施設は，移住にともない家を新築・改修する場合の仮住まいとしても利用できます。

4．いよいよ家探し

「家」ではなく，「地域」を気に入って住んでほしいので，紀美野町への移住意志が固まった方にのみ空き家の紹介をしています。田舎にどうしても貸さないといけない家はありません。先祖代々の家を使わせていただくという謙虚な気持ちで，持ち主にお願いしましょう。知っておきたい田舎暮らしの特徴は，①借り主が家の修繕を行う「現状貸し」が主流であること，②地域の一員として生活するための役割があること，③区費という自治費の負担があること，などがあげられます。

5．ご近所づきあいをしよう

引越し前に，ご近所に挨拶まわりをしましょう。祭りや地域の清掃，消防団，冠婚葬祭のお手伝いなどにも参加できるようにして下さい。また，都会と田舎の価値観の違いがトラブルを生むことがあります。自分の常識を社会の常識と思わず，柔軟な対応を心がけ，大きなトラブルになる前に間に立ってもらえる人に相談するようにしましょう。定住の会では，なんでも相談できる「世話人」の役を地域の方にお願いしています。

図 2-1　紀美野町での移住までの流れ（支援を受ける場合）

付き合い方についての情報交換等も行われている。これは，対移住者だけでなく，地元住民にも理解を求める活動を行っている点で，他の地域にも参考になるものである。また，やり方として，行政でなく第三者的な立場の大学教員が説明を行っていること，これを主目的として参集するのでなく，地域の寄り合いにあわせて行っていること等の工夫がなされている点も興味深い。なお，②のパンフレットは，移住希望者へのプレッシャーに配慮し，内容・表現の見直しが検討されている。

3. 八女福島地区について

3.1 立地条件

八女福島地区は，福岡市の南方約 50km，JR 鹿児島本線羽犬塚駅から東方約 7 km，八女 IC から東方約 5 km に位置する八女市の中心市街地である。郊外化の動きが今も進んでいるが，行政・文化機能をはじめ，多くの都市機能が地区内に残っており，生活の利便性は低くない。

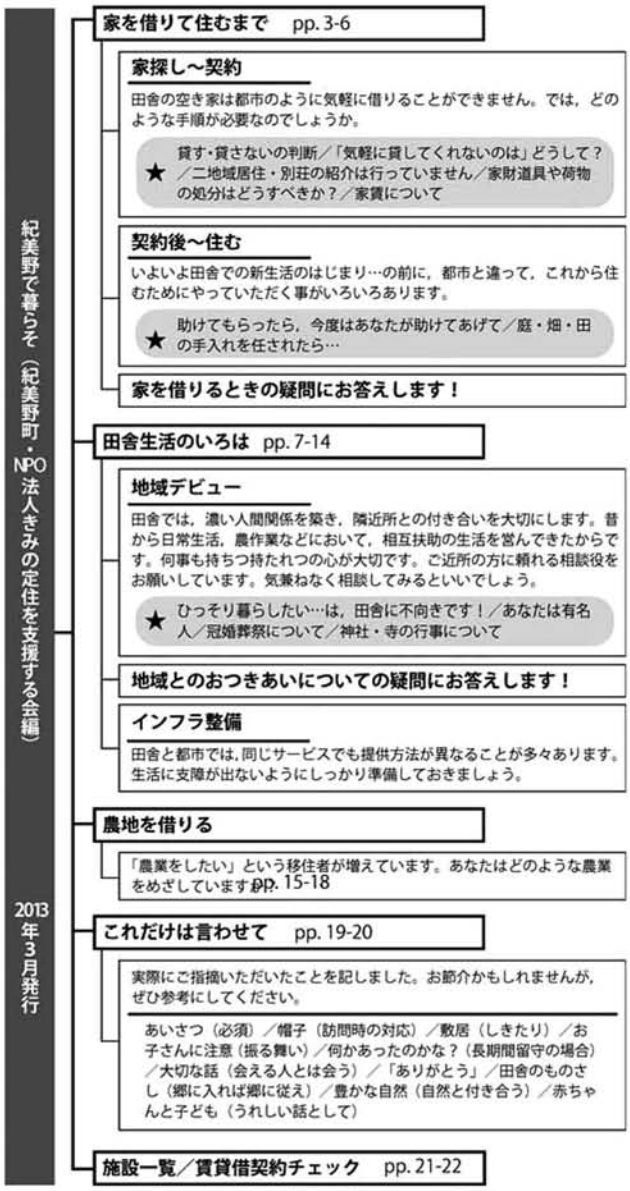

図 2-2 「紀美野に暮らそ」の構成

3.2 歴史的町並みをめぐる動き

17 世紀初頭に築かれた城下町を礎としその後は商家町として栄えた八女福島地区の歴史的町並みは，地区を東西に走る旧往還道沿いに展開され，そこには，江戸末期から昭和初期に建設された町家が立ち並ぶ（**図 3-1**）。

町並み保存をめぐる動きは，1991 年に受けた甚大な台風被害をきっかけとし，地域資源としての町並みの価値に気づいた市民が行政を巻き込む形で始まった。その後，住民主役・行政黒子の体制を整備しながら様々な取り組みが進められ，2002 年に重伝建地区の選定を受けた。

3-3 地縁組織と慣習・行事

住民にとっての身近な地縁組織は，「行政区（町内会）」と「隣組」である。隣組は，行政区を細分化した隣近所コミュニティの単位であり，10 世帯程度で構成される。

八女福島地区は，12 の行政区で構成され，それぞれの行政区では，隣組単位で行われているものも含め，様々な慣習・行事が行われている（**写真 3-1～3-3**）。ここで，慣習・行事の一例として，筆者 1 が住む「東紺屋町 4 組」の 2015 年における主な行事を**図 3-2** に示す。

また，八女福島地区全体に共通する問題として，人口の高齢化問題が顕在化している。12 行政区全体で，2014 年 3 月現在（住民基本台帳調べ），70 歳以上人口は 492 人（1,931 人中）であり，その割合は 25.5%と高い。

4. 空き家活用の取り組み

空き家の活用は，町並み保存整備行政の枠組みの中で，様々な団体・機関が連携し，進められている（**図 4-1**）。

主な組織を紹介する。「NPO 法人八女町家再生応援団（以下，NPO 応援団）」は，2003 年，空き家に関する問題に対して，専門的に対応するため立ち上げられた組織であり，同会発足以降，八女福島地区では空き家の活用が急速に図られるようになった。「八女福島空き家活用委員会」は，空き家に関する問題を地域の取り組みとして展開するため，2004 年に立ち上げられた組織である。ゆえに，同会は，八女福島地区のまちづくりを推進する「八女福島町並み保存会」の中に位置づけられている。これ

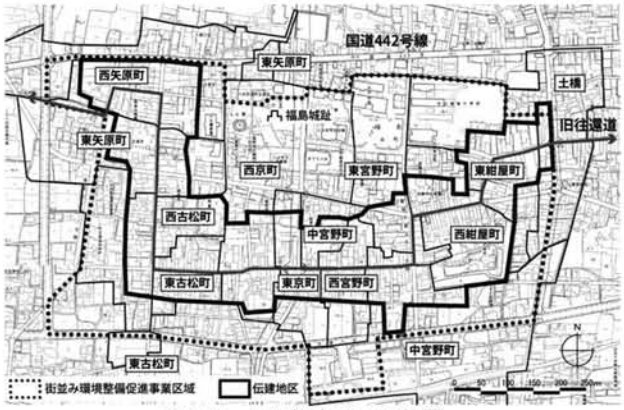

図 3-1 八女福島地区の位置

らに加えて，近年では，「NPO 法人八女空き家再生スイッチ」が，大規模な空き家の活用問題，ゲストハウスの運営や移住体験施設の運営等に取り組んでいる。

空き家が活用されるまでの経過は，それぞれのケースによるが，基本的なフローは**図 4-2** の通りである。実績は，2015 年度末現在，1995 年の街なみ環境整備事業導入以降で 40 棟の空き家（3 棟は，利用なし）について活用が図られている。うち 24 棟が住宅（併用含む）である。

5. 新旧住民の交流

5-1　調査の方法

調査は，①～③は，地元住民と移住者から協力を得て，筆者 2 が中心となり次のとおり実施した。④は筆者 1 家族で実施した。

地元住民には，保存会役員 26 名に対して 2015 年 9 月にアンケート調査を行い，空き家化問題への認識も含め，移住者との交流現状やそれに対する期待等を訊いた（**表 5-1**）。従って，この調査は，空き家活用や移住者の受け入れ等に関する情報に詳しい住民への調査ということになる。なお，ここで，空き家化問題のことも訊いたのは，以下の理由による。八女福島地区では，前述の通り，空き家の活用が積極的に進められている。このような状況の中，地域住民は，空き家化問題とその対応についてどう捉えているのか。地域としての意思確認も必要であるが，まずは保存会役員に確認したいと考えたからである。

一方，移住者には，2015 年 8 月～9 月，次の 4 種の調査を実施した。①八女福島地区への U ターン者を除く 17 名の移住者（1 名は宅老所運営）に対し，アンケート調査を行った。ここでは，暮らしの満足度や地元住民との交流状況等について訊いた（**表 5-2**）。②①で協力が得られた回答者のうち，9 名にヒアリング調査を実施し，①の回答等について詳しく訊いた。うち 1 名は筆者 1 である。③筆者 1 の暮らしぶり等について，隣近所に暮らす地元住民からの見え方を知るため，筆者 1 自宅近所に住

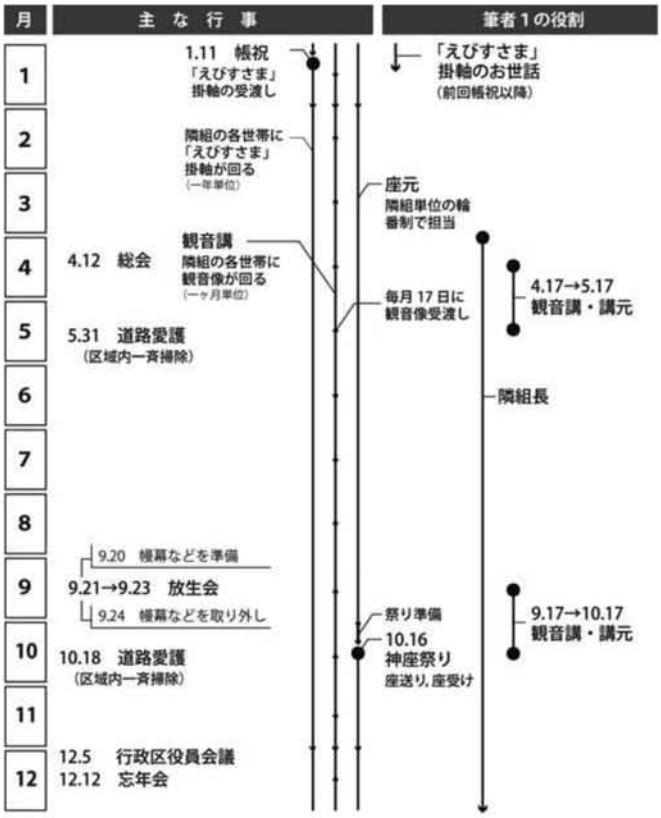

図 3-1　2015 年の東紺屋町 4 組年間行事と筆者 1 が務めた役割

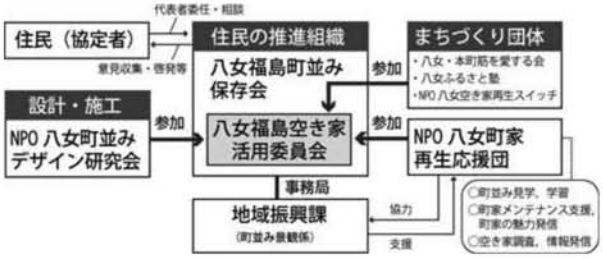

図 4-1　空き家活用委員会の構成

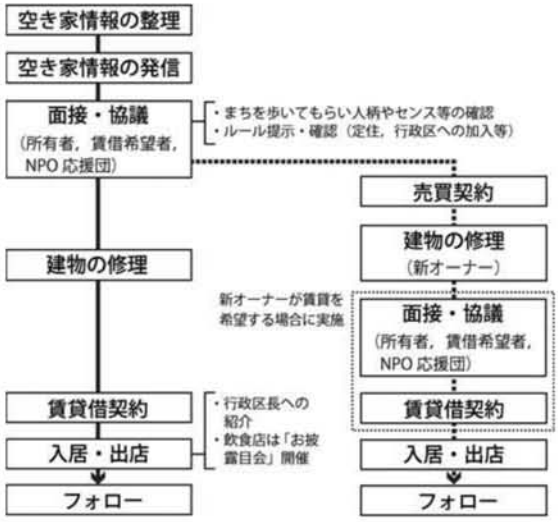

図 4-2　空き家活用のフロー

写真 3-1　道路愛護活動

写真 3-2　放生会前の帳幕準備

写真 3-3　観音講の観音像

むｂ氏～ｆ氏，５名の住民にヒアリング調査を行った。④隣近所レベルでの，移住者と地元住民による交流の具体例を示すため，2015年７月～2016年８月の13ヶ月間について，筆者１家族による近所づきあいの状況を日誌に記録した。

5-2　地元住民へのアンケート調査より

集計結果（一部）を**図5-1～5-5**，**表5-3**に示す。

回答者について，八女福島地区での居住期間（**図5-1**／問B）は，「30年以上」が66%（17名）で，「30年未満」は19%（５名）であった。ここで，「住んでいない」を選択したのは，行政区でなく，まちづくり団体からの代表者である。

空き家増加は，程度の差はあるが，全員が「問題」と捉え，**図5-3**（問４）より，空き家活用に際しては，「どちらかと言えば」を含めると，89%（23名）の人が住むことを希望した。また，空き家増加による問題については，**図5-2**より（問２），「近隣住民間のつながり・まとまりの弱体化」もしくは「地域に残る各種行事継承の困難化」を選ぶ回答者が多く，その人数は全体の半数を超える15名だった。これらの回答から，地元住民が，空き家を活用し，地域と関わりを持ちながら生活する移住者を受け入れたい意向を持っている様子がうかがえる。

八女福島地区は，移住者の受け入れに寛大なのか。**図5-4**（問５）よりこれに否定的な見解は若干数だったが，なじみ易いことを肯定する意見は54%にとどまった。しかし，居住期間30年未満の回答者５名は全て，ここで肯定的姿勢を示した。越えられないものではないだろうが，移住者が地域になじむのに障害が全くないというわけでもない状況が，ここから読み取れる。

表5-3は，移住者への期待を尋ねる問６の回答を，問２と問５の回答とあわせて整理したものである。これより，積極的な地域への関わりを期待しているのは，主に，ここに30年以上住む回答者以外であり，その中の多くの人は，地域の活動への参加を期待していることがわかる。一方，30年以上住む回答者の意見を見ると，問２と問５両方で「○」とされた回答者は，積極的な地域への関わりを通じて，地域の一員となることを望んでいた。

実際，移住者と地元住民の交流は，どのような場面で見られるのか。これを地区住民に訊いたところ，**図5-5**（問５）より，地域の各種行事が両者の接点になっていることが読み取れた。裏返せば，移住者が各種行事に参加していると見ることもできるだろう。

5-3　移住者へのアンケート調査より

回答者の属性は，**表5-4**より，八女福島地区での居住年数で見ると，比較的短い人が多く，飲食店や小売店等，地域に対して積極的に開く店舗を営む人は多くなかった。

集計結果（一部）を**図5-6～5-14**，**表5-5**に示す。

移住の理由（**図5-6**／問３）は，大半は，「町家に住みたい（11名）」と「仕事をやるのに好都合（７名）」を選ぶ人が多く，現在の暮らしへの満足度は全体的に低くない。隣近所の人との関係を問題に挙げる人もいなかった。

問７～12の回答を俯瞰すると，隣近所での交流がほとんどないという人はいないが，隣組住民の認識度（**図5-7**／問７）や隣近所との挨拶（**図5-8**／問８）での回答が，

表5-1　地元住民へのアンケート調査項目

分類	設問と回答方式
属性	A)所属する町内会等[単一]，B) 居住期間[単一]
空き家全般	1)空き家増加への認識[5段階]，2)空き家増加による問題[3制限]，3)空き家活用の必要性[5段階]，4)住宅としての活用の必要性[5段階]，
交流全般	5)移住者にとってのなじみ易さ[5段階]，6)移住者に期待すること[自由]
町内での交流 住民のみ	7)町内での移住者有無[二択]，8)移住者と地元住民の交流が見られる場面[無制限]，9)町内で移住者と地元住民のつながりが育まれることへの期待[5段階]

＊1：欄内のアルファベットと番号は設問番号を表す。[ ]内は回答方法を表す。
制限＿：＿つまで選ぶ制限付回答法，＿段階：＿段階回答法，自由：自由記述等。

表5-2　移住者へのアンケート調査項目

分類	設問と回答方式 ＊1
属性	A)居住年数[単一]
暮らし全般	1)移住の理由[制限3]，2)暮らしの満足度[5段階]，3)前問の回答理由[自由]，4)住んで良かったと感じることの有無[二択]，5)住んで良かったと感じることの内容[自由]，6)継続居住希望[5段階]
隣近所での交流状況	7)隣組住民の認識度[3段階]，8)隣近所との挨拶[3段階]，9)隣近所との立ち話等頻度[3段階]，10)おすそ分けによる交流頻度[3段階]，11)困った時の相談相手の有無[二択]，12)町内行事(隣組行事含む)への参加状況[4段階]
自己評価	13)校区レベルでの交流状況[5段階]，14)隣組レベルでの交流状況[5段階]
姿勢と支援の必要性	15)地域の歴史・文化への理解を深めることへの姿勢[5段階]，16)近所づきあいへの姿勢[5段階／転入時と現在]，17)近所づきあいの難しさ[5段階]，18)円滑な近所づきあいのための支援の必要性[5段階]と支援内容[自由]

＊1：欄内のアルファベットと番号は設問番号を表す。[ ]内は回答方法を表す。
制限＿：＿つまで選ぶ制限付回答法，＿段階：＿段階回答法，自由：自由記述等。

表5-3　移住者に期待すること[地元問６]

問B	問2 ＊1	問5 ＊2	問6
住んでいない	○	×	地域行事への参画。
	○	×	移り住んで来る方は，仕事の問題とかで大変だと思いますが，時間が許す限り，まちづくりに参画してほしい。
30年以上居住	○	×	住民が高齢化しているので，将来は，もっと空き家が多くなり，行政区内の行事をやるのも困難になる。世帯数の増加に期待したい。
	×	×	地域に馴染んでほしい。
	○	○	早く同化されるよう，祭事や習慣行事に積極的に参加してほしい。
	○	○	笑顔で挨拶と声かけを辛抱強くやり，皆さんに覚えてもらってほしい。家族や仕事も，皆さんに知ってもらってほしい。
	×	×	若い人たちの行動力，感覚を発揮してもらいたい。心豊かに楽しく生活できることに尽力してほしい。
	○	×	八女らしさをもった商品を企画・販売できる起業家。
	×	×	長く住んでほしい。
	×	×	歴史的な町並みが好きで，理解のある方に町家を使ってほしい。
	○	×	高齢化が進んでいるので，若い方にぜひ住んでほしい。
	○	×	町内行事には参加，出席してほしい。
30年未満居住	○	×	地域の行事には積極的に参加してほしい。
	○	×	ここに限った話でなく，地域社会に馴染めるか，は本人次第。挨拶や地域の中での役割(当番等)をきちんとすることが必要。
	○	×	地域の歴史・文化を学び，地域の活動に参加してほしい。
	×	×	地域の活性化に取り組んでほしい。

＊1：問2での「近隣住民間のつながり・まとまりの弱体化」か「地域に残る各種行事継承の困難化」選択の有無。
＊2：問5での「どちらかと言えばなじみにくい」か「なじみにくい」選択の有無。

限定な範囲にとどまる人が７名いる。これらの人のほとんどは，居住年数が「1-3 年」の人である。

反面，隣近所の人との交流が比較的進んでいる人として，隣組住民の顔と名前（**図 5-7**／問７）で「概ね一致する」と答え，かつ，隣近所との挨拶（**図 5-8**／問８）は「日常的にする」と答えた回答者 10 名に共通する特徴を探すと，次の３点を見出せる。①**図 5-13**（問 16）で，「どちらかと言えば」を含め，近所づきあいに対して積極的な姿勢を持って転居してくる人が多い（９名）。しかし，この中に，現在の姿勢として（**図 5-14**／問 16），「どちらとも言えない」と答えた人が２名いることは気にかかる。②**図 5-10**（問 12）を見ると，「できる限り参加するようにしている」という姿勢で，町内行事に参加している人が多い（８名）。③居住年数が４年以上の人がほとんどである（８名）。ここに，交流状況は，居住年数に左

表 5-5　移住者へのアンケート調査の回答者

	1-3年	4-6年	7年以上	計
飲食店	0	2	0	2
工房・事務所	2	3	3	8
その他	6	0	1	7
計	8	5	4	17

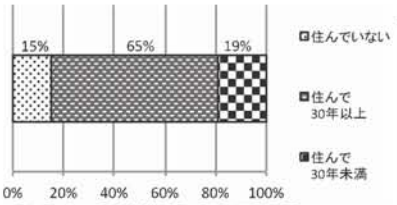

図 5-1　居住期間［地元問 B］

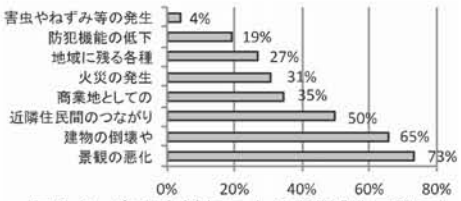

図 5-2　空き家増加による問題［地元問２］

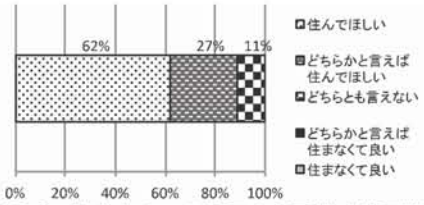

図 5-3　住宅としての活用の必要性［地元問４］

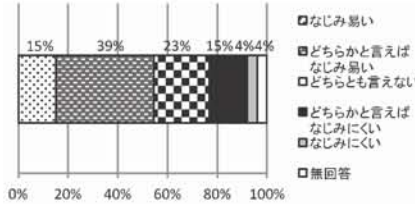

図 5-4　移住者にとってのなじみ易さ［地元問５］

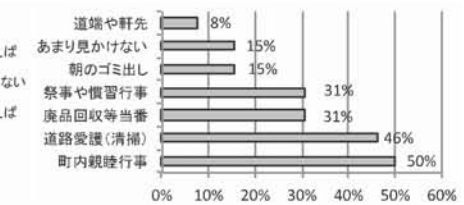

図 5-5　移住者と地元住民の交流が見られる場面［地元問８］

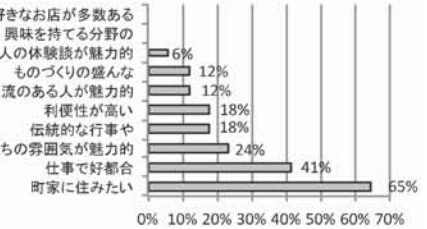

図 5-6　移住の理由［移住者問３］

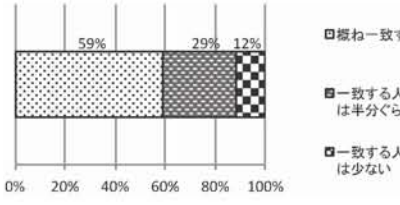

図 5-7　隣組住民の認識度［移住者問７］

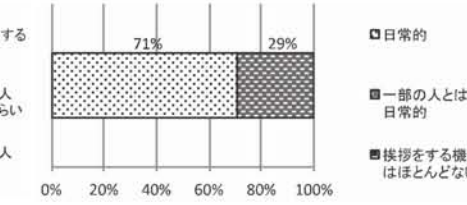

図 5-8　隣近所との挨拶［移住者問８］

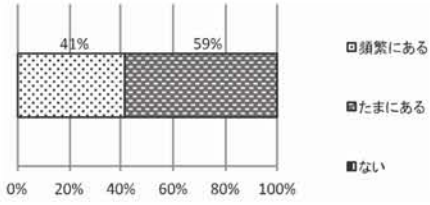

図 5-9　隣近所とのおすそ分けによる交流頻度［移住者問 10］

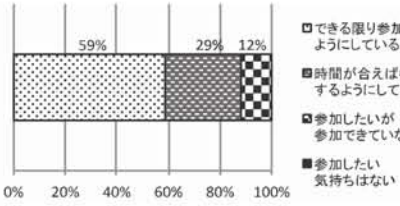

図 5-8　町内行事への参加状況［移住者問 12］

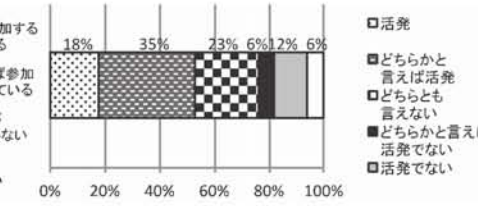

図 5-11　隣組レベルでの交流状況の自己評価［移住者問 14］

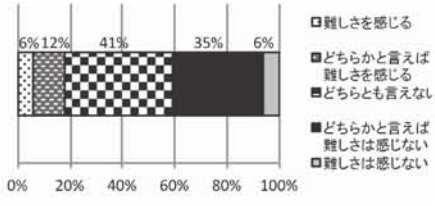

図 5-12　近所づきあいの難しさ［移住者問 17］

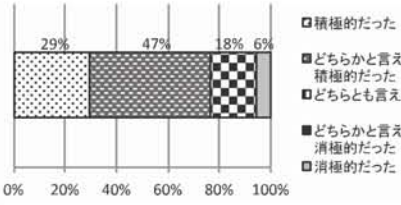

図 5-13　転居時の近所づきあいへの姿勢［移住者問 16］

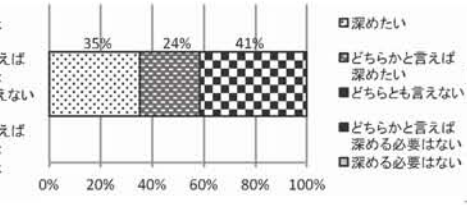

図 5-14　現在の近所づきあいへの姿勢［移住者問 16］

表 5-6　移住者へのヒアリング調査の回答者

回答者	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	F氏	G氏	H氏	筆者1
世帯人員（子供）	4人(2)	2人	2人(1)	2人	5人(3)	2人	3人(1)	3人(1)	2人
移住年	2006	2007	2009	2009	2010	2010	2012	2012	2006
建物用途	工房・事務所併用住宅	飲食店併用住宅	工房・事務所併用住宅	飲食店併用住宅	工房・事務所併用住宅	工房・事務所併用住宅	専用住宅	専用住宅	専用住宅

表 5-5　近所づきあいでの支援策の提案［移住者問 18］

	近所づきあいにおける支援策についての提案
1	地方には，どうしても閉鎖的な部分ができてしまっていると思う。移住者が，どこまでコミュニティに入り込みたいか次第だが，入り込みたいのであれば，支援は必要。転入者をどう受け入れる心がまえや転入者との接し方を，受け入れる側が知っていくことも必要だと思う。
2	町の歴史や慣習の習得支援。町家で暮らすための相談窓口の設置。
3	ちょっとしたことで良いので，人と人をつないだり，何かあったら声をかけてくれるようなことがあると良いと思う。
4	移住者には見えにくい，地域独自のルールを事前に教えてもらえると暮らしやすい。地域の人にとっては当たり前のことの中に，移住者にはわからないことがある。
5	移住者同士がゆるやかにつながり，情報交換・共有できる場が欲しい。

右される傾向を垣間見ることができる。しかし，中には「1-3年」の人も2名おり，両名は①と②にも該当する。

近所づきあいは，移住者に難しいものなのか。程度は問わず，**図5-11**（問17）で，難しさを感じると答えたのは，筆者1を含む3名しかいなかった。対して，難しさを感じないと答えた人が，「どちらかと言えば」を含めると6名もおり，これらの人は全て，前述の①と②に該当する人であった。しかし，近所づきあいにおける支援について訊くと，その必要性を認める人は6名いた。ここで提案された内容は**表5-5**のとおりであり，その中には，「移住者には見えにくい，地域独自のルールを事前に教えてもらえると暮らしやすい」や「転入者を受け入れるための心構えや転入者との接し方について，受け入れる側も配慮していくことが必要だと思う」等の意見が見られた。一方，この6名以外からは，「人と人の関係は，各自で手探りを重ねながらつくるもので，第三者に支援してもらうものではない」という意見も見られた。同様の意見は，後述のヒアリング調査でも複数名から聞かれた。

写真5-1　筆者1自宅（2015年放生会で撮影）

表5-7　町内行事や近所づきあいについてのb氏～f氏の考え方

分類	主な意見
町内行事への移住者の参加	○地域の外で働いている人に，無理は言えない。出ごとは，出られる人が出れば良い。 ○仕事が休みで，自宅にいるのならば，行事に出てきて欲しい。 ○住民同士でコミュニケーションをとる機会として，行事は大事だと思う。 ○全面的でなくても良いから，行事に参加して欲しい。助かるというのもあるが，何よりも，つながり，接点をつくれる。 ○行事は，その人のことを知るきっかけになる。近況含め，互いのことを知ることができる機会だから大切だと思う。
伝統的な行事・慣習を継承すること	○古いまちだから，行事があるのは当たり前だと思っている。伝統的な行事は，私たちも簡略化をしてしまったが，できる限り残していきたい。 ○行事は，引き継ぎたい立場。昔は，夫婦で参加した。色々と事情はあるだろうが，年に数回なので，こういう行事は夫婦で参加して欲しい。 ○若い人が，伝統的な行事に興味を持ってくれるのは嬉しい。 ○古くから残る行事は大切。そういうものを通じて，地域のまとまりができるのだと思う。
近所づきあい	○人と話せる機会は，大切にしていきたい。そういう機会が減ってきてしまっているから。挨拶も大事。小学生でも，知らない人でも，こちらから挨拶する。年寄りは，挨拶をしてもらえると嬉しい。 ○挨拶は大切。子供が挨拶をしない等と聞くが，子供から挨拶をしてくるのを待つのでなく，大人が声をかけるのが大切だと思う。そうやって，挨拶の大切さを伝えていくのが大切だと思う。 ○隣近所で，お互い気にかけている。電気が1日，2日ついていないと，何かあったのかな，と思う。昔は，夕方になると，暑い時期はちょっと水をまいて，その時に顔を合わせて挨拶をして。家の出入りをする時間が少しずれて，顔を合わせる機会も減ると，ちょっと気になって。 ○昔，この辺にいた人は，軒先に花を植えていて，通りがかりの人に挨拶して。きっと，会話の機会を大切にしたかったのだと思う。最近は，だんだんそういうのがなくなってきたから。 ○古いし，若い人には煩わしいかもしれないが，隣近所のつきあいは大切だと思う。自分自身が，年をとるにつれて，そういう気持ちが強くなってきた。不安がある。 ○生活感を感じられること，周りを気にかけておくことは大切。高齢者のみで暮らす家も増えてきているので，特にそういうのは大切。 ○人それぞれ，色々な考え方があるだろうから，無理強いはしたくない。深入りはせず，つながりを保っていきたい。 ○私たちも，嫁として来た立場だが，そこまで入りづらいところだとは感じなかった。郷に入れば，郷に従え。それで，昔からいるような顔をして，楽しく生活してきた。
移住者に期待すること	○ちょっとしたことでも，地域と接点を持ってくれると嬉しい。少しばかり気に入らなくても，古くから住んでいる人と接点を持って欲しい。 ○古い人たちが，新しい人たちに溶け込んで欲しいと思っているのだから，こちらから声をかけていかないと。どんどん，挨拶をしていかないといけない。 ○都会から来た人には，わからないこともたくさんあるかもしれない。隣組もそうだろうが，なかなかわかりにくいことがあると思う。 ○土地に入ろうとして，色々とやってくれるのは嬉しい。町内の人にもつきあってくれて。周りのことも気にかけてくれると嬉しい。 ○どういう考えを持っているのか等，外に信号を出して欲しい。わからないと，こちらもどうして良いのかわからない。だからこそ，接点をつくることが大切。それは，昔からいる人がつくっていく必要があると思う。

5-4　移住者へのヒアリング調査より

ヒアリング調査は，**表5-6**に示す9名（筆者1家族も含む）に対して実施した。この中で，移住の理由（**図5-6**／問3）の一つとして，「伝統的な行事やコミュニティが魅力的」を挙げたのは，C氏のみである。

地域に，これまでの自らの生活や価値観との違いがあることは認めていた。しかし，全員がそれを前向きに受け入れていた。隣近所の人との交流についても，交流の範囲に違いはあるが，不満を抱いている人はおらず，むしろ周りに支えられていることを実感している人が複数いた。中には，「むしろ，隣近所の人との交流が楽しい（同様5名）」や「子どもを育てる環境として，近所づきあいがあるのはありがたい。子どもも良くしてもらって，喜んでいる（E氏）」というポジティブな意見も聞かれたほか，「こういう地域での地元の人と交流は，住まわせてもらっている感覚に戻る貴重な機会になる（F氏）」と表現する人もいた。また，飲食店を営む2名からは，「お店のことを心配，応援してくれるのでありがたい」という感謝の声も聞かれた。一方，近所づきあいでの不安として複数名から挙げられたのは，「近づいた距離の調節の仕方がわからない」であり，より広範囲での交流という点で，「まちづくりに取り組む方々の情熱と自分の気持ちとの間にギャップを感じ，活動に参加しづらい」という意見も複数名から得られた。

筆者1を除く8名に，地域との関わりについて大切にしていることを訊くと，全員が「地域の中に自分たちが入ってきたので，地域を受け入れていくのが当然」という認識を持っていた。そして，多くの人が「自ら積極的に，地域に関わっていくことが大切」と考え，日常的な挨拶や声かけ，町内行事への参加を大切にしていた。中には，「周りに高齢の方が多いので，私たちが周りに気を配っておかないと」と思い，隣近所との日常的な接点を大切にしている人もいた。その一方で，引っ越してきた当初のこととして，「周りの人たちが私たちのことを気にしているのは感じていたが，なかなか，隣近所の住民との距離を縮められなかった」という意見も聞かれた。

さらに，自ら地域に関わる姿勢を持つことのほか，地域の人との関わりを育んでいくために有効だと思うことについて訊くと，「町内での生活について，身近に相談できる人ができると心強い」という意見が，全員から聞かれた。中には，「同じ立場の移住者同士で，地域のことを相談できる仲間が近くにいる」ことを挙げる人もいた。これらのほか，少数派だが，筆者1と同様，「軒先の植物が周りの人との会話のきっかけや，隣近所の人の状況をうかがうきっかけになる」と考えている人もいた。

5-5　筆者1による交流状況

1）自宅とその周辺

筆者1の自宅は，産物・和紙・茶などを扱う商人が多く居住した紺屋町にある。建築形式は，妻入入母屋の真壁造で，規模は，延べ床面積が約120 ㎡，間口・梁間ともに2.5間の本2階建てである（**写真5-1**）。建築年代は，保存対策調査で，「明治初期の建築」と言われている。

約3年間空き家であったことで損傷劣化が深刻化していた，この建物は，NPO 応援団と行政が連携して考案した「管理委託方式[文7)]」により修理・活用が図られたものである。修理工事は，2005年度の伝建事業として実施された。この間，2006年1月，地元小学生による土壁塗り体験，4月には，私が担当する研究室の学生による三和土土間のたたき締め体験が行われた。

筆者1は，現職に就くまで，東京都の外に住んだ経験はなく，妻は熊本県内の農村地域の出身である。なお，筆者1の実家は，まだ都内にある。

筆者1家族は，行政区は「東紺屋町」，隣組は「4組（7世帯で構成）」に所属する。b氏～f氏へのヒアリング調査によれば，筆者1自宅周辺は，「住民の入れ替わりが少なく，古くから続く家が多い。高齢者が多く，筆者1が来る以前は，よく“限界集落”と呼ばれた」ようである。また，自宅前の道路は，地区内の他の道路に比べると，自動車交通量がやや少なく，比較的歩きやすい。b氏宅の縁側（通り側）では，日中，隣近所の人が集まり，いわゆる「井戸端会議」が行われている。

ここで，ヒアリング調査を実施したb氏，d氏，e氏，f氏は，同じ東紺屋町であり，d氏～f氏（**図5-15**中のa氏も同じ）は同じ隣組である。c氏は，隣の「西紺屋町」に属するが，いわゆる「お向かいさん」である。

表5-7は，町内行事への移住者の参加等，近所づきあいについての考え方として，ヒアリング調査で聞かれた主な意見を整理したものである。これより，あくまでも筆者1自宅周辺に限られることであるが，行事・慣習が残る地域性を受け入れており，それを継承していきたい意向が強いこと，周りの人を感じながら生活していること，住民同士の接点を大切にしようとする姿勢を持っていること等が，全体的な傾向として読み取れる。

2）転居までの経緯

私が，この建物に移り住んだのは2006年5月であり，その縁は，現在の職場に赴任した2003年から継続的に，八女福島地区を研究・教育活動のフィールドとしていたことにある。転居を考えるようになった直接的なきっかけは，ここでの活動の支援者（建築士）から，「これから修理する町家で，借り手を探しているものがある」という声掛けがあったことによる。最終的には，支援をしてくれる人たちがいることに心強さを感じつつ，八女福島地区で地域により密着した活動（特に教育活動）をしたいと考え，転居を決めた。

一方，受け入れ側となる隣近所の人たちは，行政区長は知っていたかもしれないが，「どんな人が来るのだろう」と思っていたようで，「まちづくりに興味がある人が来るらしい」程度しか，情報は聞いていなかったようである。

3）10年間の暮らしを振り返る（近所づきあいを中心に）

図5-15に，近所づきあいに対する私の意識・行動の変化の過程とb氏～f氏へのヒアリング調査結果（一部抜粋）を示す。**図5-16**には，2016年8月までの13ヶ月間の近所づきあいの状況を示す。この図では，日常の中で交わされる挨拶や雑談は記録していない。筆者1家族が，隣近所の人との接点を多くつくり出したいと思い，「楽しく」を原則に，心かげていたことや試してみたことに関する交流を主として記した。例えば，軒先空間に会話のきっかけになりやすいものを置く（ベンチ設置や植物栽培等），ファサードに閉鎖感を感じさせないようにする（通り側の窓を開ける等），地域のリズムに合わせる等である。これらの他，町内行事での交流やおすそ分けによる交流等も併せて記録した。

以下では，これらの図に基づき，主観的側面もあるが，筆者1による10年間の暮らしを振り返る。

まず，引っ越してきてからの約3年半についてである。この間，まちづくりの活動に取り組む方々との交流を重ねつつ，学生とともに諸活動に取り組み，イベント時にはできる限り自宅を開放していた。これらをすることで，自分では，地域に開いた暮らしをしていると思っていた。当時のことについて，b氏～f氏へのヒアリング調査では，「独身だったし，働いている場所も遠いし，仕事も忙しいだろうから，特にどうこう思っていなかった」等，ネガティブな意見は聞かれなかった。しかし，省みると，当時は，地域に閉鎖的な暮らしをしていたように感じる。なぜなら，町内行事にも参加しておらず，隣近所との接点も少なかったうえ，隣近所の人たちの生活を気にする配慮も欠けていたからである。

その後，いくつかの転機で，筆者1の，ここでの暮らし方が変わった。隣近所の人との交流が活発化し，地域に暮らしているという実感を得られる機会が増え，ここ

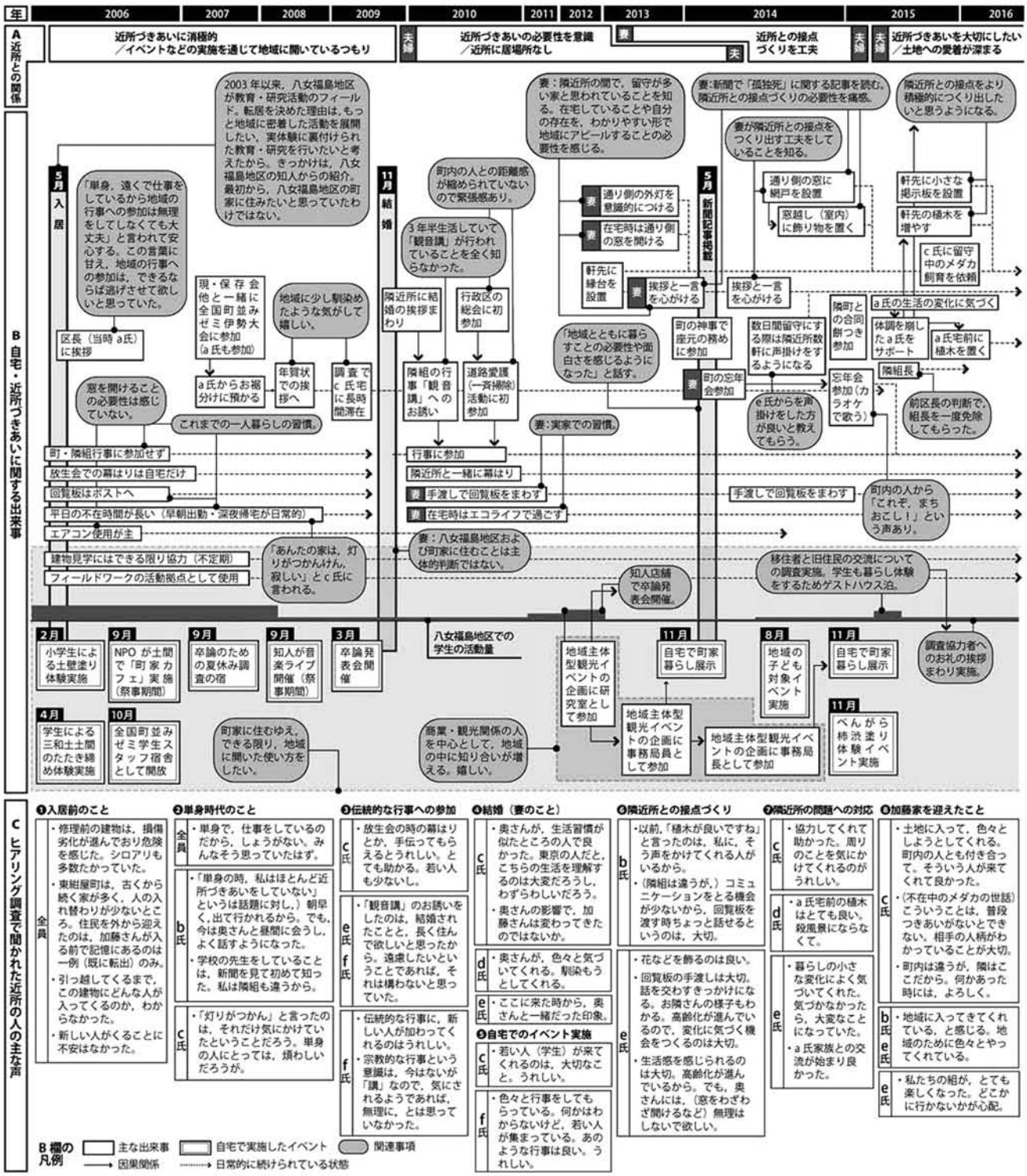

図 5-15　2006 年からの 10 年間における筆者 1（家族含む）の近所づきあいの変化

写真 5-2　通り側の窓を開ける
（2016 年端午の節句で撮影）

写真 5-3　軒先菜園「紺屋町菜園」（2016 年 7 月撮影）

写真 5-4　軒先菜園を通じた交流
（2016 年 6 月撮影）

月日*1	応対*2	できごと	2015年
07.04	妻	隣組で，入院中の隣人（組員）のお見舞へ。
12	妻	誘いを受けて，近所の川辺へ隣人と一緒に月見草を見に行く。
15	妻	通りがかりの西紺屋町の知人（移住者）を交え，c 氏妹と庭木について立ち話。
16	妻	2階窓開放で掃除中，通りで立ち話をするd氏と隣人から「トマト，いる？」と訊かれる。
	妻	夕方，土間で作業中，網戸の向こうからc氏が手を振って挨拶。その後，外で立ち話。
17	妻	朝，植木への水やり中，通りがかったf氏と隣人に挨拶。
19	夫	隣組長として，回覧板を回し，広報を各戸に配る。
21	妻	表の戸を開けて掃除。通りがかりの町内の人と隣人とで，花の話をする。
22	妻	朝，「植木鉢，あげるよ」とf氏が来訪。植木鉢を譲ってもらう。e氏宅の庭も見せてもらう。
25	妻	c氏妹から，近所で開催されるコンサートの誘いを受ける（先約で行けず）。
29	妻	夕方，自宅前の縁台に座るc氏と話す。続けてお茶に誘われ，c氏宅へ。20時頃まで滞在。
30	妻	隣組長として，回覧板を回し，広報を各戸に配る。
31	妻	f氏から回覧板が戻り，玄関でf氏と立ち話。
08.10	妻	出勤する夫の見送り時，c氏から野菜をもらう。夕方，混ぜご飯のおにぎりでお返し。
13	夫	隣組長として，回覧板を回し，広報を各戸に配る。
15	妻	c氏から刺身をもらう。
24	家	夜，迫りくる台風に備える。
26	家	台風対策を解く。a氏宅の雨戸を一緒に開ける。a氏宅前に置く植木は，b氏が厚意で保護。 f氏から「もう使わない」とのことで，土鍋と火鉢を譲ってもらう。
28	家	c氏から切花をもらう。生け方のアドバイス付き。
30	夫	隣組長として，回覧板を回し，広報を各戸に配る。
	妻	翌日から出掛けるので隣近所に声掛け。c氏にメダカを預かってもらうことを依頼。
09.03	妻	自宅へ戻る。c氏に帰宅の報告とお礼。カボスをもらう。
04	妻	e氏から回覧板が届く。留守中に敬老会の声掛けを代わりにやってもらったことを知る。
07	妻	隣家との共用扉の鍵交換。f氏も立会い。
08	夫	町内の人に「メダカ飼育用に火鉢を譲ってほしい」と相談。火鉢を譲ってもらう。
10	妻	翌日から出かける旨，隣近所に声掛け。
15	妻	植木，メダカの世話。留守中に配布された広報をe氏が預かってくれていたのでお礼する。
	妻	立ち話で，隣人数人から敬老会の話を聞く。フラダンスをやったらしい。
	夫	b氏から放生会で献灯する際に使う，東紺屋町の提灯をもらう。
17	妻	d氏から観音像が回ってくる。
18	夫	「放生会の準備（幕はり）を何時頃から始めるか」をf氏に聞くが，わからず。
19	夫	「放生会の準備（幕はり）を明朝7時半頃から始める」ことを隣近所数人で確認。
20	家	7時半頃から，隣近所で協力して放生会準備（幕はり）。男性の姿が例年より多かった。
24	夫	前日の雨で幕をはずせなかったので，夫は手伝いをせず出勤。
26	夫	朝，花への水やり中，f氏から自宅前に設置する看板のイベント情報について尋ねられる。
27	夫	夕方，土間で作業中，c氏が覗きに来る。近所の店舗で開催されるライブについて情報交換。
29	妻	c氏から野菜をもらう。不要なものが数点あるようで「座布団，必要ないか？」と訊かれる。
10.01	妻	d氏とメダカについて立ち話。f氏からは，ぜんざいをもらう。
	妻	隣組長として，回覧板を回し，各戸に広報を配る。広報を届けた時，d氏と雑談。
02	妻	夜，縁台に座ってe氏と雑談。
05	妻	ぜんざいのお礼で，f氏に饅頭をお返しをする。b氏からパンをもらい，饅頭をお返しする。
08	妻	隣人数名とメダカの話をする。
14	妻	夕方，軒先の植木に水やり中，通りがかりの町内の人に挨拶し立ち話。
	妻	隣組長として，回覧板を回し，各戸に広報を配る。
15	妻	f氏から回覧板が戻り，玄関でf氏と立ち話。
17	夫	f氏へ観音像を回す。
18	家	朝，町内の道路愛護に参加。外堀掃除でザリガニを捕る（飼育へ）。
15	妻	f氏から回覧板が戻り，玄関でf氏と立ち話。
20	妻	西紺屋町の知人（移住者）親子が，散歩の途中に立ち寄る。
22	妻	夕方，c氏妹から柿をたくさんもらう。
28	妻	西紺屋町の知人（移住者）親子が，散歩の途中に立ち寄る。
29	妻	町内の人が柿とカボスを持ってきてくれる。
11.01	夫	c氏がふらっと来て雑談。うどんをもらう。
02	妻	西紺屋町の知人（移住者）親子が，夫同士の書類のやり取りで来訪。しばらく雑談。
04	妻	隣組長として，回覧板を回し，各戸に広報を配る。
11	家	隣人のお見舞い。
12	妻	夕方，声がするので外へ出てみると，隣人3名が縁台で雑談。野菜を少しずつおすそ分け。
14	妻	隣組長として，回覧板を回し，各戸に広報を配る。広報を届けた時，生活情報をe氏に訊く。
20	妻	翌日から出掛けるので隣近所に声掛け。
24	妻	メダカの手入れ時，隣人3名と雑談。散歩中のe氏夫も参加。c氏から野菜をもらう。 f氏から編物を教えてもらう約束をする。
25	家	トライアルワーキングで，一ヶ月間滞在する筆者3の家族を招いて夕食。
28	妻	a氏宅の片付けを手伝う。
12.02 -09	夫	妻不在。妻が不在になると，隣近所の状況がほとんどわからなくなることに気づく。
05	夫	町内の役員会出席。話題は，翌週の忘年会企画。
06 -09	夫	隣組長として，忘年会出欠確認と集金。平日は，迷惑をかけない時間の訪問は難しい。
12	夫	夜，忘年会参加。カラオケで3曲歌う。うち1曲は，e氏とデュエット。
13	夫	植木を植え替え。回覧板が戻り，f氏と昨晩の忘年会の話をする。
14	妻	c氏から貝をもらう。
17	家	トライアルワーキングで一ヶ月間滞在する筆者3家族から，夫婦で夕食の招きを受ける。
20	夫	c氏に貝のお礼。軒先植木がきれいに紅葉している話をする。
24	妻	大掃除で，通り側の窓掃除。c氏妹と挨拶。
25	妻	大掃除で，通り側の外灯掃除。c氏，e氏と立ち話。c氏妹は，洗車。
27	妻	隣組長として，各戸に広報誌を配る。翌月の帳祝の話をする。
28	家	隣近所に年末の挨拶をして帰省。

月日*1	応対*2	できごと	2016年
01.06	妻	帳祝の件で，d氏が相談に来る。
09	家	帳祝で，隣組で夕食へ。地域のことを色々と訊く。a氏宅前植木が喜ばれる。
15	妻	隣組長として，各戸に広報を配る。
05	妻	植木の手入れ時，散歩帰りのf氏と会い雑談。c氏妹とも久々に雑談。 寒くなり家の中に引きこもるようになると，交流機会が減ることを実感。
02.06	家	初午祭（西紺屋町行事）へ。普段は，交流機会が少ない西紺屋町の皆さんに挨拶。 ちゃんと話をしたのは，一昨年末の西紺屋町・東紺屋町合同の餅つき大会以来か。
10	妻	野菜のおすそ分けで，西紺屋町の知人（移住者）宅へ。 c氏から「先日，豚汁を持ってきたが，留守だった」と聞く。
18	妻	d氏から観音像が回ってくる。前日まで妻不在のため，1日遅れ。
22	妻	野菜のおすそ分けで，西紺屋町の知人（移住者）宅へ。
24	妻	西紺屋町の知人（移住者）と近所でランチへ。
29	妻	隣組長として，回覧板を回し，各戸に広報誌を配る。 夜中，気づかぬうちに植木鉢が一つ割れる。
03.02	妻	f氏が植木鉢を軒先にそっと置いてくれる。b氏から，a氏宅前植木を褒められる。 夜，c氏よりぜんざいをもらう。
13	夫	町内ゴミ拾い，河川清掃活動に参加。町内の移住者と一緒に回る。
22	妻	町内の婦人部の食事会に参加。
27	妻	29日から出掛けるので隣近所に声掛け。留守中の回覧板管理をe氏にお願い。 「30日に町内の役員会開催」と聞くが，留守のため欠席。
04.03	妻	e氏に帰宅の報告とお礼。
06	妻	留守中に回覧板が回ってくる。夜，隣人へ回す。
09	妻	c氏からパンをもらう。総会の出欠届を区長へ。
12	妻	c氏から木の芽と筍をもらう。
05.05	家	菖蒲とヨモギを玄関に飾る。表に出す予定で，野菜のコンテナ栽培を裏庭で始める。
	妻	e氏からさくらんぼをもらう。
25	妻	夕方，軒先でメダカの世話。c氏妹に挨拶。通りがかりの人もよく話しかけてくれる。
31	妻	隣組長のd氏から広報誌が届く。f氏から回覧板が届く。
06.02	妻	c氏より「自宅の設備更新工事を始めるので，色々と迷惑をかける」と挨拶がある。
07	妻	軒先でメダカの世話。c氏妹，d氏に挨拶。
10	妻	植木への水やり時，c氏より「久しぶり」と挨拶される。
14	妻	西紺屋町の知人（移住者）親子との立ち話に，c氏，c氏妹，f氏が合流。 その後，d氏から広報誌，f氏から回覧板が届く。
18	妻	夕方，軒先の植木への水やり中，c氏妹と立ち話。
19	家	ゴーヤを栽培するコンテナを表に出す。c氏から支柱の立て方の手ほどきを受ける。 その後，散歩中のf氏も立ち寄り，記念写真撮影。
24	妻	c氏がゴーヤを気にしている様子に気づく。
26	妻	ゴーヤの話題でc氏と立ち話。
07.10	夫	校区による清掃活動。回覧板では，任意とのことだったが，多くの世帯が参加。
	家	なす，パプリカを栽培するコンテナを表に出す。
14	妻	d氏から広報誌が届く。外出中に回覧板がポストに届く。 翌日から出掛けるので隣近所に声掛け。
17	妻	朝，観音像が届く。留守中，なすとパプリカのコンテナが倒れた模様。 b氏が，コンテナが安定するよう，厚意で置き方を工夫してくれたことを知る。 c氏，f氏と縁台で談笑。昔は，各戸前に縁台があって，夕方はそこで 涼を取っていたようだ。野菜の成長も気にしてくれていた。
18	妻	d氏，e氏と家庭菜園の話で盛り上がる。
	夫	b氏にコンテナの件でお礼。「肥料や虫よけも用意してくれていた」と聞く。
21	妻	夕方，植木への水やりと打ち水。c氏妹からコンテナ栽培や一輪挿しを褒められる。
22	妻	メダカの世話時，c氏とc氏友人と立ち話。
23	妻	メダカの世話時，c氏とc氏妹と立ち話。西紺屋町の知人（移住者）親子も合流。
25	妻	町内の婦人部の廃品回収活動に参加。隣人から「菜園，毎日みてるよ」と言われる。 f氏からは「紺屋町菜園」という名前を褒められる。
27	夫	朝，散歩へ。帰宅時，c氏が縁台に座っていた。 日中，通りがかりの小学生が，メダカを観察する声が聞こえた。
28	夫	朝，縁台に座るc氏から見送ってもらう。
	妻	夕方，植木への水やりや打ち水で外に出ると，c氏がイスに座っていた。 談笑後，ピーマンをもらう。通りがかりの人にパプリカのことで話しかけられる。
08.01	妻	c氏妹から切り花をもらう。
02	妻	隣人から「ナス，大きくなっていますね」と声をかけられる。
07	夫	西紺屋町の和菓子屋へ，メダカを数匹分けに行く。
09	妻	夕方，植木への水やりや打ち水の時，c氏から梨をもらう。
10	妻	夕方，帰宅時，c氏宅で西紺屋町の知人（移住者）親子がいたので合流。 植木への水やりや打ち水の時，c氏妹が帰宅してきて立ち話。そこにe氏夫も合流。
12	妻	翌日から出掛けるので隣近所に声掛け。c氏に野菜コンテナへの水やりをお願いする。
16	妻	夕方，c氏に帰宅報告と御礼。「水，やっとったよ」とのこと。
17	夫	朝，植木への水やり。ナスもパプリカもが大きくなっていることに気づく。
	妻	観音像，f氏へ。隣組長d氏より回覧板が届く。組長に留守を事前に言うべきだった。
20	夫	夕方，植木への水やりや打ち水時，同僚と遭遇。その後，c氏，f氏と夕飯献立の話。 休日の夕方，外に出ると，隣近所の人とよく会っていることに気づく。
27	妻	メダカの世話時，d氏と立ち話。
30	妻	翌日から1週間出掛けるので隣近所に声掛け。今度は，隣組長にも伝える。

*1：太字は，土日祝日を表す。　*2：家は，夫婦を表す。

図 5-16　2015年7月から2016年8月の筆者1（家族）による近所づきあいの様子

での暮らしを楽しいと感じられるようになった。これに伴い，地域への愛着も明らかに強くなった。これは，筆者1だけでなく，夫婦に共通することである。また，隣近所の人との距離が近づいたことで，生活がやりづらくなった，とも感じていない。相談事やお願い事もしやすくなり，周りの人が，その時々の距離感も含め，私たちの暮らしのことも気にしてくれるようになったので，むしろ，生活しやすくなったように感じている。

ところで，近所づきあいが活発化したのはなぜか。受け身の姿勢をやめ，自分を開き，隣近所の人と関わることができる時間を大切にするようになったことが，その理由ではないかと考える。

町内行事での交流はもちろん，挨拶の後や回覧板を渡す時の少しの時間も，言葉を交わせる貴重な時間だと思うようになった。これについては，A 氏からも似た意見が得られ，その言葉に筆者1も強く共感した。A 氏は，「挨拶のあとに，ちょっと立ち止まる。必ず一品がついてくるから。地域の歩幅で歩くことが大事。でないと，一品をもらえる貴重なチャンスを失ってしまう」と，独特の表現で語った。ここで「一品」とは，気構えを要せず，互いの関係を深められる小さな会話のことであろう。

さらに，2015 年からは，生活が内部に閉じ籠もらぬよう軒先空間の使い方を工夫し，隣近所の人や通りがかりの人との関わりをつくり出そうとしている（**写真 5-2～5-4**）。町家は，ミセの間の商業利用がなくなると，もしくは，専用住宅として使うと，当然だが，住人の生活は内側へ入り込みがちになる。結果，煩わしさも減るが，隣近所の人の生活は感じ取りにくくなる。筆者1家族は，高齢化の進む地域でこうした状況が発生することへの危機感を強く感じるようになり，軒先空間の活用を始めた。

とは言え，筆者1の場合，難しいことはしておらず，軒先でメダカを飼う，植木を育てる等，楽しくできることしかしていない。また， 2016 年からは，隣家の前まで借りて，野菜のコンテナ栽培「紺屋町菜園」を始めている。野菜の方が，収穫の楽しみも隣近所の人と共有できると考えたからである。結果，**図 5-16** に示すとおり，これらの活動を始めたことで，自分たちの暮らしが外へと広がり，隣近所の人との会話が活発に起こるようになった。筆者1家族に共通する実感で言うと，隣近所の人との会話の機会が圧倒的に増え，隣近所の人の生活もより身近に感じられるようになった。なお，こうしたことを始めたのは，この前年，近所に暮らす身近な地元住民の健康面のトラブルに直面し，近所付き合いの大切さと，ここにおける私たち家族の役割に気づいたからである。

6. おわりに

本研究では，移住者としての自らの生活体験をふまえ，福岡県八女福島地区での事例研究を行い，移住者と地元住民による交流の可能性について検討した。結果，両者による交流は，容易に進まないだろうが，徐々に深めていくことはできる，と結論づける。また，移住者と地元住民による交流が進めば，バックグラウンドが異なる両者の間に良好な関係性が育まれ，それぞれの生活がより豊かになりうることも，可能性としてここに示しておく。

移住者と地元住民の関わりを育むには何が必要なのか。ここで必要なことは，両者の歩み寄りと時間であろう。また，互いの距離を縮めていくには，移住者と地元住民の関わりが深まることによる魅力が，それぞれの立場から感じられる機会が増える[注10]ことも必要である。

一方，両者の交流を阻害する要因については，筆者1による実生活での経験より，地元住民との交流を進めることに対して，当該地域へ入る側の移住者が受け身の姿勢になってしまうことが挙げられる。また，自らの価値観や立場を優先し，地元住民の生活スタイルや価値観への配慮を後回しにしていることも，その要因として挙げられるだろう。筆者1は，自宅でのイベント実施等により地域に開いた暮らしをしているつもりでいたが，町内行事には参加していなかった。結果，地元住民との距離もさほど縮められなかったからである。前述では，両者の歩み寄りが必要という立場を示したが，こう考えると，その突破口を切り拓く上では，移住者にその役割を期待したい。この際，以下の①～③が重要になると考える。

①様々な違いを前向きに受け入れる姿勢を持つこと。これは，受け入れ側である地元住民にも言えることであるが，年齢的な事情もふまえると，地元住民に対して積極的にそれを求めることは難しいだろう。

②建物に暮らす意識で完結せず，地域の中に暮らす意識を持ち，地域に対する理解と地域に自ら関わる姿勢を示すこと。これは，八女福島地区で生活する移住者の多くが心がけていたことであり，他地域での調査でもその必要性が指摘されていたことである。

③やり方は様々あるだろうが，地元住民との接点を大切にすること。中でも，町内行事には，積極的に行ったほうが良い。八女福島地区で実施した全ての調査結果に共通して，その必要性，あるいは有効性が見えたからである。ここで，地元住民との接点を大切と考える理由は，地元住民は移住者との接点を探している，ということがわかったからである。また，地元住民には，移住者の人柄等を知っておきたいという気持ちもあるようである。

これらの他，移住者へのヒアリング調査から，町内での生活について，身近に相談できる人ができると，移住者にとっては心強く感じられるようになることもわかった。紀美野町のように，移住者と地元住民で構成される移住者の受け入れを支援する団体が立ち上げられ，柔軟に対応していくのも良いだろう。

一方，地域の側では，町並みを住文化が残る居住空間

としても定義し，空き家活用を進めることが望まれる。そして，移住者受け入れに際する心構えや，移住者が地域に入ることのメリット等の情報を，地元住民が個人レベルで共有できる仕組みを整えたほうが良い。八女福島地区では，保存会の仕組みを活用し，行政区やまちづくり団体の代表者にこうした情報が伝えられていた。しかし，その情報が当該地域に暮らす個々人に届いているかと言えば，ヒアリング調査結果や筆者らの実体験からその可能性は低い。移住者と関わりを持つのは，日常をともにする個人レベルの地元住民である。ゆえに，こうした仕組みの必要性について検討が始められて良いだろう。この時，参考にしたいのが，紀美野町で定期的に実施されている地域説明会である。地域の行事にあわせて行われていることと，行政でなく第三者的立場から説明が行われていることは，その実効性を高める上で重要なポイントである。

移住者と地元住民の間で良好な関係が築かれることは，片方でなく双方の暮らしを豊かにする上で，そして，後の移住者の受け入れのためにも大切である。特に，歴史的市街地という特性をふまえると，地域文化継承や地域社会の持続という点で，その重要性は増すであろう。

謝辞

調査にご協力をいただいた皆さま，そして，日々の暮らしの中でお世話になっている八女福島地区の皆さまに，この場をお借りし，心より御礼を申し上げます。

＜注＞

1)宇高雄志：全国の伝建地区における空き屋問題の現状と動向−平成10年，15年，17年実施のアンケート調査結果を通じて−，全国伝建地区空き屋問題研究会，2006.3 等。

2)矢吹剣一他：歴史的市街地における空き家再生活動に関する研究：長野市善光寺門前町地区を対象として−長野市善光寺門前町地区を対象として−，都市計画論文集，Vol.49-1，pp.47-52，2014.4 等。

3)加藤浩司他：伝建地区における空き家の発生要因と活用の仕組みに関する研究−八女福島伝建地区を中心事例として−，住宅総合研究財団研究論文集，No.35，pp.107-118，2009.3。

4)NPO 法人今井まちなみ再生ネットワーク：今井町町家暮らしのすすめ，2009.3。

5) ヒアリング調査成果をふまえ，筆者１家族による八女福島地区での生活のふり返ると，都市的地域には，農村集落とは違い，異なる個が集まり形成される社会に入ることへの難しさがあるように感じる。こうした社会に移住者が馴染もうとする場合，入口は開いているように見えるが，その後の移住者と地元住民の間の距離の縮まり方はその逆で，日常の中での様々な場面を共有しながら，段階的に縮められていくように感じる。

6)過疎化が進む農山村地域での移住者の受け入れを進めるため，2006 年度より和歌山県が進めている事業。「移住促進市町村(2016 年 10 月末現在 18 市町村)」として位置づけられると，田舎暮らしに関する「ワンストップパーソン（市町村職員)」と地域住民の「受入協議会」が設置され，行政と連携して移住者を支援する取り組みが進められるようになる。

7)「NPO 法人きみの定住を支援する会」の定款とホームページに基づく。ホームページは次のとおり。NPO 法人きみの定住を支援する会：きみので暮らそ。(里山で生活する，という選択。)，http://www3.plala.or.jp/kiminoteiju/（2016.10.26)。

8)次の資料に基づく。NPO 法人きみの定住を支援する会編：きみの暮らし（紀美野町定住支援ガイド)，紀美野町。NPO 法人きみの定住を支援する会・紀美野町編：紀美野で暮らそ，2013.3。

9) NPO 法人きみの定住を支援する会・理事長の私見であるが，次の見解は示唆に富む。「どこの市町村も若い人に来て欲しいと言うが，暮らしの文化や地域の行事等を継承するという点で言うと，移住者は，世代のバランス良く来てくれると良いと思う。若い人は，自分の生活で精一杯だから。」

10) 筆者１は， 2016 年 7 月より，試行として，地域の暮らしを移住者目線で綴る日誌を SNS で書いている。紺屋町ソト活同好会，https://www.facebook.com/yamekurashi/(2017.2.8)。

＜参考文献＞

1) 加藤浩司：歴史的市街地に移り住む−八女福島地区での私の10年間の暮らし−，2016 年度日本建築学会都市計画部門 PD（限界住環境のゆくえ）資料集，pp.43-46，2016.8

2) 三栗野鈴菜，加藤浩司：歴史的市街地における移住者・出店者による地域交流に関する研究−その２：八女福島地区における移住者による近隣交流について−，2016 年度日本建築学会大会学術講演梗概集，pp.117-118，2016.8

3) 三栗野鈴菜，吉川みくる：伝建地区における空き家活用と移住者による近隣交流についての研究−八女福島伝建地区を事例として−，2015 年度有明高専卒業論文，2016.2

4) 加藤浩司，中島宏典：重要伝統的建造物群保存地区を有する歴史的市街地における空き家活用の取り組み，2015 年度日本建築学会大会建築社会システム部門研究協議会（空き家をリ・デザインする）資料集，pp.47-50，2015.9

5) NPO 法人八女町家再生応援団：八女福島の町並み地区における空き家再生活用の仕組みづくりの検証と創造，2015.3

6) 加藤浩司：歴史的市街地の空き家再生を考える有明高専生の夏休み活動−福岡県八女市福島地区における 2015 年の活動−，日本高専学会誌，vol.21(1)，pp.43-48，2016.1

7) 加藤浩司：八女福島伝建地区における「管理委託方式」による空き家修理・活用の試み，日本建築学会技術報告集，第 29 号，pp.281-284，2009.2

＜研究協力者＞

服部忠（有明高専専攻科２年生)，吉川みくる（松尾建設)，持丸未来，内野絢香（以上，有明高専４年生)，加藤久美